

Title	蘇軾の樂園と「自娛」
Author(s)	趙, 蕊蕊
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2014, 48, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56603
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

蘇軾の樂園と「自娛」

趙 蕊 蕊

キーワード…桃花源／樂園／仇池／自娛

「中国の樂園」と言えば、まず思い浮かぶのは陶淵明の「桃花源記」だろう。そこには平和で喜びに満ちた樂園が描き出され、中国における樂園の典型となっている。陶淵明以後、多くの文人たちが桃花源について詩にうたってきた。例えば、唐代では孟浩然「武陵汎舟」、王維「桃源行」、劉禹錫「桃源行」、宋代になると梅堯臣「桃花源詩」、王安石「桃源行」など、あるものは桃花源の物語を述べ、あるものは桃花源の安らかな生活への憧れを表明している。いずれも桃花源は、空想上のユートピアとして捉えられている。

ところが、蘇軾が晩年に書いた「和桃花源詩」は、これら先人とは異なる形で桃花源を捉えている。桃花源に対して懐疑的な態度を有していたのである。これは韓愈「桃源図」が「桃源之説誠荒唐（桃源の説 誠に荒唐）」と説くのを受け継いだものである。蘇軾のこの態度は、何によってもたらされたのだろうか。また、蘇軾にとって憧れの樂園は存在していたのだろうか。存在したとすれば、果たしてそれはどのようなものだったのだろうか。

一 「和桃花源詩」と仇池

蘇軾は晩年、陶淵明の詩に唱和する多くの「和陶詩」を作った。その中に「和陶桃花源」詩がある。⁽¹⁾ 紹聖元年(1094)の四月、蘇軾は龍図閣学士を免ぜられ、六月に寧遠軍節度副使として惠州に安置された。張志烈・周裕鏞等『蘇軾全集校注』によれば、この詩は紹聖三年(1096)、流刑地の惠州にあつての作である。

その序文の冒頭は「世に桃源の事を伝うるも、多くは其の実に過ぐ」と述べ、桃花源の伝説に対する疑念を提出する。これによって、従来の文人たちが作りあげてきた桃花源への幻想は打ち破られる。次いで南陽と青城山の長寿村の事例を挙げて、この世に樂園は実在することを示す。例にあげる二つの土地は、ともに美しく汚れ無き場所であるが、桃花源のように非現実的な場所ではない。そのような土地について述べたうえで、かつて蘇軾が夢で訪れた「仇池」もそれに類する場所であることを述べる。では、蘇軾が夢に見たという仇池は現実に存在するのだろうか。

文献に記録されたものについて見ると、『後漢書』に記載されている仇池は、西南の少数民族が住んでいた峻険の地であると記されている。⁽²⁾ 最も詳しく仇池について説明するのは『元和郡県志』であり、そこには「仇池」は曾て三国の時の蜀国に属し、晋宋の間、楊難当に守り固められた。一人が道を防禦すれば、万夫が当たってもかなわないほど険しい地勢を有すると書かれている。⁽³⁾ 同様の記述は『太平寰宇記』にも見える。⁽⁴⁾

このように仇池は、文献に記載される古蹟である点で桃花源が備えていない独特の性格を有するが、しかしそれだけにとはどまらない。以下、詩の中身について見てみよう。

凡聖無異居、清濁共此世。心閑偶自見、念起忽已逝。欲知真一處、要使六用廢。桃源信不遠、杖藜可小憩。躬耕
 任地力、絕学抱天藝。臂鷄有時鳴、尻駕無可稅。蒼龜亦晨吸、杞狗或夜吠。耘耔得甘芳、齏醬謝炮製。子驥雖形
 隔、淵明已心詣。高山不難越、淺水何足厲。不如我仇池、高拳復幾歲。從來一生死、近又等痴慧。蒲澗安期境、
 羅浮稚川界。夢往從之遊、神交發吾蔽。桃花滿庭下、流水在戶外。却笑逃秦人、有畏非真契。(凡聖 居を異に
 する無く、清濁 此の世を共にす。心閑かなれば偶たまま自ずから見、念起くれば忽ち已に逝く。真一の處を知らん
 と欲すれば、六用をして廢せしむるを要す。桃源 信に遠からず、杖藜 小しほし憩うべし。躬ら耕して地力に任
 せ、学を絶ちて天藝を抱く。臂鷄 時に鳴く有り、尻駕 税とくべき無し。蒼龜 亦た晨に吸い、杞狗 或いは夜
 に吠ゆ。耘耔 甘芳を得、齏醬 炮製を謝す。子驥 形を隔つと雖も、淵明 已に心詣いたる。高山 越すに難から
 ず、淺水 何ぞ厲するに足らんや。我が仇池に如かず、高拳 復た幾歲。從來 生死を一にし、近ごろ又た痴慧
 を等しくす。蒲澗 安期の境、羅浮 稚川の界。夢に往きて之に従いて遊び、神交わりて吾が蔽ひらを發く。桃花
 庭下に満ち、流水 戶外に在り。却つて笑う 秦を逃れし人、畏れ有るは真契に非ざるを。)

右の詩で蘇軾は、心がのんびりすると桃源を見ることができると述べている。蘇軾がここで強調するのは「心」の
 持ち方次第で桃花源の境地を味わうことができるという考え方である。この点において蘇軾はそれ以前の詩人たちと
 大きく異なっている。「桃花源記」の中の漁師も「心閑かなる」境地のもと偶然に桃花源に迷い込んだ。その後、別
 の人々が誰一人として桃花源を探し当てられなかったのは、蘇軾が「念起くれば忽ち已に逝く」と言うように、余計
 な「念」を抱いたが故であろう。

蘇軾は、二度と探り当てることのできない桃花源は仇池に及ばないと考えている。それは恐らく、桃花源が非實在

の土地であるのに対し、古くから仇池が人々が隠れ住み、安期生や葛洪が身を置いた蒲澗や羅浮山と同様の道教の福地であったからであろう。蘇軾が思い描く仇池イメージの源流は杜甫「秦州雜詩二十首」其十四（『全唐詩』卷二二五）の「万古仇池穴、潜通小有天。神魚人不見、福地語真傳。（万古 仇池の穴、潜かに小有天に通ず。神魚 人見ず、福地 語は真に伝わる。）」である。蘇軾の詩に述べる「生死を一にす」「痴慧を等しくす」は、老莊思想が唱える「齊万物」「一生死」「絶学棄智」などの思想ともつながり、福地としての仇池の性格を明確にしている。

詩の末尾に「却つて笑う」とあるように、蘇軾は秦の暴政を逃れて桃花源に逃れ住んだ人々に対して疑問を提出する。そのうえで、桃花源の住人たちは自然の境地に達しておらず、自らにとつて真の知己たりえないと見なしている。では、蘇軾にとつて真の知己たりえるのは、どのような人物なのであろうか。

同じく晩年の作である「和陶読山海経」（『合註』卷四〇）其十三には次のように述べる。

東坡信畸人、涉世真散材。仇池有帰路、羅浮豈徒来。踐虵及茹虫、心空了無猜。携手葛与陶、帰哉復帰哉。（東坡 信に畸人、世に涉りて真に散材なり。仇池に帰路有り、羅浮 豈に徒いたづらに來たらんや。虵を踐むと虫を茹うと、心空しくして了いに猜う無し。手を携う 葛と陶と、帰らん哉 復た帰らん哉。）

冒頭、蘇軾が才能を有するにもかかわらず、官途において不遇の状態にあるため、すっかりしよげかえっている状態を提示する。そのために、仇池に赴いて、その地で隠逸の生活を送りたいと願う。蛇を踏み、虫を食う仇池の環境は原始の自然状態であり、世俗の影響を受けていない。そこに行けば、心の中に怨みや猜忌が無く澄みわたり、現実を遠く離れることができる。心の清らかな状態を守ろうとする蘇軾の望みがよく現われた詩である。そのうえで、最

後の句に「仇池」に対する憧れをうたう。「帰哉」の語を繰り返して用いて、葛洪と陶淵明と互いに手を携え、仇池に隠居しようという願望を表明している。

本詩によって、蘇軾にとっての知己は、葛洪や陶淵明のような人物であったことがわかる。秦を逃れた桃花源の住人とは異なり、彼らは隠逸を実践した高士。葛洪は官を辞し、陶淵明は俸禄を拒んだ。いずれも、自己を守るため自由なる生活を目指したのである。

蘇軾は晩年、仇池に帰隠することを願っていたが、これは決して一時的な願望ではなかった。それは次節に述べるように、彼がそれまでに書いた作品の中で繰り返し「和陶桃花源」詩に述べていた「潁州の夢」に言及していること、そして「仇池石」なる石を身辺に置き愛でていたことから見て取れよう。

二 仇池石と帰隠

元祐七年（1092）蘇軾は揚州に知事として赴任する。揚州に到着した後の作である「双石」（『合註』卷三五）の序文に、「潁州の夢」に言及する記述が見える。彼は揚州で得た双石によって盆景を作り、詩には以下のように述べた。

夢時良是覺時非、汲井埋盆故自痴。但見玉峰橫太白、便從鳥道絕峨眉。秋風与作烟雲意、曉日令涵草木姿。一点空明是何処、老人真欲住仇池。（夢みる時は良に是なるも覺むる時は非なり、井を汲み盆を埋むるは故より自ずから痴なり。但だ見る 玉峰 太白に横たわり、便ち鳥道に従いて峨眉を絶するを。秋風 与に烟雲の意を作

し、暁日 草木の姿を涵ひたさしむ。一点の空明 是れ何処、老人 真に仇池に住まんと欲す。）

石の描写を通して夢に見た仇池を表現する。「太白」「煙雲」「峨眉」「草木」など、言葉としては大自然の景色を描写するが、実際には白い石と緑の石を描写したものである。末句の「真」字は、夢見た仇池に住もうと願う願望が真実のものであることを強調する。

では、仇池石は具体的にはどのような石だったのでろうか。「僕所蔵仇池石、希代之宝也。王晋卿以小詩借觀、意在於奪。不敢不借、然以此詩先之（僕の蔵する所の仇池石は、希代の宝なり。王晋卿 小詩を以て借觀するは、意は奪うに在り。敢えて借さずんばあらず、然れども此の詩を以て之に先んず）」（合註 卷三六）に、詳しく仇池石の来歴を述べている。

海石来珠宮、秀色如蛾緑。坡陀尺寸間、宛転陵轡足。連娟二華頂、空洞三茅腹。初疑仇池化、又恐瀛洲蹙。殷勤嶠南使、餽餉揚州牧。得之喜無寐、与汝交不瀆。盛以高麗盆、藉以文登玉。幽光先五夜、冷氣压三伏。老人生如寄、茅舍久未卜。一夫幸可致、千里常相逐。……（海石 珠宮より来たる、秀色 蛾緑の如し。坡陀 尺寸の間、宛転として陵轡足る。連娟たり 二華の頂、空洞たり 三茅の腹。初めて疑う 仇池の化するかと、又た恐る 瀛洲の蹙れるかと。殷勤たり 嶠南の使、揚州の牧に餽餉す。之を得て喜び寐ぬる無く、汝と交わりて瀆れず。盛るに高麗の盆を以てし、藉くに文登の玉を以てす。幽光 五夜に先んじ、冷氣 三伏を压す。老人 生は寄するが如し、茅舍 未だ久しく卜せず。一夫 幸いに致すべく、千里 常に相い逐う。……）

自注「僕在揚州、程德孺自嶺南解官還、以此石見贈」によると、仇池石は元祐七年（1092）、蘇軾が揚州にいた時、程德孺から手に入れたものである。蘇軾はその石を大切にしていたこと、「壺中九華詩」（『合註』卷三八）に「念我仇池太孤絶、百金婦買碧玲瓏（我が仇池のただ孤絶せるを念い、百金もて婦買せん 碧の玲瓏）」と述べているほどである。仇池の石がとても寂しがつているので、北に帰る時、いくらかかってもいいから「壺中九華」という石を買いたいと望んでいる。この仇池石は、蘇軾の友人たち、王詵（字晋卿）、錢勰（字穆父）、王欽臣（字仲至）、蔣之奇（字穎叔）なども大いに興味を示していた。「王晋卿示詩、欲奪海石……」（王晋卿 詩を示して、海石を奪わんと欲す……）（『合註』卷二六）⁽⁸⁾と題する詩もあるように、王詵はこの石を奪おうとすらしていた。これほどまで多くの人が所有したいと願う仇池石は、いったいどのような魅力を持っていたのか。また、蘇軾にとつてどのような意味を持っていたのだろうか。

右に挙げた「王晋卿示詩、欲奪海石……」詩には「逝將仇池石、婦泝岷山瀆（逝きて仇池石を將つて、婦りて岷山の瀆を泝らん）」とある。「岷山瀆」というのは岷江を指している。蘇軾の故郷眉山は岷江の畔にある。つまりここで蘇軾は、仇池の石を携えて岷江の畔の故郷に帰りたいと願っているのである。この他にも、程德孺が蘇軾にこの石を贈ったときのことをうたった「程德孺惠海中栢石、兼辱佳篇、輒復和謝（程德孺 海中の栢石を恵まれ、兼ねて佳篇を辱けなくす、輒ち復た和して謝す）」（『合註』卷三六）に「但指庭前双栢石、要予臨老識方壺（但だ庭前の双栢石を指し、予に老いに臨みては方壺を識るを要む）」とある。「方壺」というのは伝説の仙山を指しているが、蘇軾が年老いた時の隠居の場を指していると解して良いだろう。

こうして、仇池石が帰隱願望と結びついていたことは大いに注目される。同様の観点から、先に見た「双石」詩を振り返って見よう。右の「僕所藏仇池石……」詩の第二句に「秀色 蛾緑の如し」とあることから、仇池石は「双

石」詩にうたわれていた緑色の石を指していることが分かる。「双石」詩で蘇軾は、その緑石について「便ち鳥道に従いて峨眉を絶す」とうたっていた。ここで蘇軾は、仇池石から峨眉山を聯想している。このことを踏まえて、「双石」詩末尾の一句「老人 真に仇池に住まんと欲す」を読むならば、それは故郷に帰って暮らそうと言っているとして良いだろう。周裕鍔氏も仇池石を論ずるなか、「怪石が蘇軾に心の癒しを与え、日夜夢見る故郷や仙境の仮想の代替物⁹⁾」となったという見解を述べている。

北宋にあつては、いったん仕官の道を選ぶと、死に至るまで故郷に帰らなかつた士大夫が多く存在したと考えられる。蘇軾の場合も、熙寧元年（1068）の冬、父の喪に服するため戻っていた故郷の蜀を離れた後、死ぬまで帰ることはなかつた。蘇軾の晩年の作品には、帰郷への願いの気持ちが盛んに表現される。例えば、「寄高令（高令に寄す）」（『合註』卷四〇）には「別後与誰同把酒、客中無日不思家（別後 誰ともと酒を把らん、客中 日として家を思わざるは無し）」という詩句があり、故郷への思いが常に彼の心底にわだかまっていたことが分かる。こうした思いから、蘇軾が憧れる楽園には自ずと故郷の影が差すことになったのだろう。

三 仇池への帰隠と「自娛」の精神

蘇軾にとって故郷とは、魂に慰めと安らぎをもたらしてくれる場所であつた。その詞「定風波」（常羨人間琢玉郎）に「試問嶺南応不好。却道、此心安処是吾郷（試みに嶺南を問わば応に好からざるべし。却って道^いう、此の心の安らかなる処は是れ吾が郷なりと）」¹⁰⁾という句がある。呉曾は、この句は白居易に基づくと見なしている。¹¹⁾「白居易が『終老の地』として『洛陽』を選択したのは、たまたまそこが、『身・心』の『閑・適』を実現する場として最高の条件

を具えていたからにはかならない⁽¹²⁾。白居易と同様に、蘇軾が歴史的古蹟であると同時に道教の福地でもある仇池を樂園と見なしたのは、その地が「閑・適」を叶えてくれる場所であったからである。「和桃花源詩」の「夢に往きて之に従いて遊び、神交わりて吾が蔽を発く^{ひら}」や「和陶讀山海經」の「心空しくして了に猜う無し」などの詩句は、そのことを述べたものである。

白居易は真の「閑適」を実現するためには「身世 交も相い忘る」ことが必要だと見なしている⁽¹³⁾。この句は二つの面を含んでいる。一つは「忘世」、世間の俗事、とりわけ官僚文人にとつては官界の名利を忘却すること。もう一つは「忘身」、自分自身、とりわけその社会的役割を忘却すること。この「忘世」と「忘身」もまた、蘇軾の詩に頻出する。「和桃花源詩」にもそれは見られ、「心閑かなれば偶ま自ずから見る」は「忘世」、「要らず六用をして廢せしむ」は「忘身」に対応する。

「忘世」と「忘身」を実現するための方法が、すなわち隠逸である。隠逸と一口に言っても、その中身は多様である。白居易は隠逸を「大隠」、「中隠」及び「小隠」の三種に分けて捉えている⁽¹⁵⁾。これによれば、「古今隠逸詩人之宗⁽¹⁶⁾」と称された陶淵明の隠居は「小隠」に属する。それに対して、白居易が目指すのは「中隠」である。では、蘇軾の場合、どのような隠居のスタイルを目指していたのだろうか。

嘉祐四年(1059)、二十四歳の蘇軾は「入峽」(『合註』卷一)に「試看飛鳥樂、高遁此心甘(試みに飛鳥の楽しみを見て、高遁 此の心甘し)」と、帰隱への志向を述べている。また、熙寧五年(1072)年の作に「六月二十七日望湖樓醉書五絶」其五(『合註』卷七)があり、「未成小隱聊中隱、可得長閑勝暫閑(未だ小隠と成らずして聊か中隠す、長閑の暫閑に勝るを得べけんや)」という句が見える。これを見ると、蘇軾は「中隠」の生き方に満足していたことが窺われる。後年、すでに見たように「和桃花源」の序は潁州の夢について「予在潁州、夢至一官府、人物与

俗間不異、而山川清遠、有足樂者。顧視堂上、榜曰仇池（私は潁州にいた時、夢に官衙にたどりついた。その人々は世間と異ならないが、山水は清らかで美しく、楽しみに満ちていた。堂を顧みると、扁額に「仇池」とあった）と述べている。現実の世界にあつては「官府」は政治、「仇池」は隠居をそれぞれ象徴するものであり、互いに排除し合う関係にある。ところが、潁州の夢で蘇軾はそれらを統一しようとしている。ここには、仕官と隠居のどちらか一方を選び他方を棄てるのではなく、両者のバランスを追求しようとする姿勢を認めることができる。右にあげた「六月二十七日……」詩が述べるような隠逸、すなわち白居易以来の「中隱」が、蘇軾にとっては目指すべきものとして捉えられていたと言えるかもしれない。⁽¹⁷⁾

「中隱」を指摘した白居易は、「閑適」の暮らしを叶え、また「閑適」の詩を多く作った。「身閑」「心閑」「体適」「思閑」などの言葉も彼の作に多く見える。蘇軾の場合にはどのような心性が見られるだろうか。それを表すのに最も相応しい語を挙げるとすれば、それは「自娛」ではないだろうか。蘇軾はこの「自娛」の態度をもって積極的かつ樂觀的に人生を生きた。そのことを象徴するかのように、彼の作品には「自娛」「娛人」「娛客」「娛心」という言葉が多く見える。

空翠娛人意自還。（空翠 人を娛しませ 意自ずから還る）（「過泗上喜見張嘉父二首」〔合註〕卷二六）

窮奇真自蠹、詩句且娛心。（奇を窮むるは真に自ら蠹む、詩句 且く心を娛しましむ）（「雪林硯屏率魯直同賦」卷二七）

草書非字聊自娛。（草書は字ぶに非ず 聊か自ら娛しむ）（「六觀堂老人草書詩」卷三四）

石泉解娛客、琴筑鳴空山。（石泉 解く客を娛しませ、琴筑 空山に鳴る）（「峽山寺」卷三八）

何以娛我客、游魚在清澗。(何を以てか我が客を娛しましめん、游魚 清澗に在り)〔丙子重九二首〕卷四〇)

こうした「自娛」の精神を説くのは詩だけではない。特に書簡には繰り返し「自娛」が説かれている。⁽¹⁹⁾ 例えば、黄州にいた時、「与子明兄一首」(『文集』卷六〇)には「自娛」について次のように説明している。

吾兄弟俱老矣、当以時自娛。世事萬端、皆不足介意。所謂自娛者、亦非世俗之樂、但胸中廓然無一物。即天壤之内、山川草木虫魚之類、皆是供吾家樂事也。(私たちも老いたから、折に触れて「自らを娛しませる」べきである。世事はさまざまであるが、どれも気に留めるには及ばない。「自らを娛しませる」というのは、世俗的な快樂をいうのではない。ただ胸中ががらんと空しく何も無い状態をいうのだ。そういう状態になると、天地の内にある山川や草木や虫魚の類は、すべて私たちにとって楽しきものとなるのだ。)

蘇軾は北へと帰る際に、蘇轍に向けて同様の内容からなる書簡を送っている。⁽²⁰⁾ 彼がこのように繰り返し「自娛」を強調するのには、どのような意味があるのだろうか。「世事萬端、皆不足介意」や「胸中廓然無一物」といった言葉からは「忘世」「心空」の状態が見て取れる。つまり、彼にとつての「自娛」は、世俗の楽しみではなく、超俗の楽しみであった。

白居易の「自足」「自適」に比べると、蘇軾の「自娛」はより積極的な行為であると言えるかも知れない。「自足」「自適」は環境に自分を順応させることであるが、「自娛」は環境を踏まえつつも主体的に楽しみを作り出すこと、自らを楽しませることをいうと考えられる。これによって蘇軾は、自然の万物の中に楽しみを見つけて陶醉し、心を慰

めることができた。

また「自娛」は、世事、とりわけ官途の苦勞に対処するためのものでもあった。蘇軾は北宋の激烈な党争に巻き込まれた。帰隱の志向を懐いてはいたが、儒家的な精神によって困難な時代状況に向き合わなければならなかったのである。「初到杭州寄子由二絶」(『合註』卷七) 其一に「眼看時事力難任、貪恋君恩退未能(眼に時事を看るに力任せ難く、君恩に貪恋たりて退くこと未だ能わらず)」、「喜王定国北帰第五橋」(『合註』卷二六)に「世事飽諳思縮手、主恩未報恥帰田(世事 飽諳して手を縮めんことを思い、主恩 未だ報ぜざれば帰田するを恥ず)」とある。

かかる状況下にあつて挫折に直面したとき、彼は「自娛」「自遣」によって内面の苦悶を解消しようとした。⁽²¹⁾ 具体的には「声色」「作詩」「書」などによって自らの苦悶を解消しようとするのだが、こうした「自娛」は現実に対抗するために編み出されたものと言つても良いだろう。蘇軾は、党争に巻き込まれながらも、屈することなく精神の独立を維持した。その支えとなつたのが「自娛」の精神であつたと考えられる。

建中靖国元年(1101)、北へと帰る時に蘇軾は「頼有銅盆修石供、仇池玉色自瓊瓏(22)」(頼いに銅盆有りて修石に供す、仇池 玉色 自ずから瓊瓏)という句を書いている。これによって、仇池石は、元祐七年(1092)に蘇軾が手に入れた後、ずっと彼のそばにあつたことがわかる。仇池石の愛好、そして仇池への憧れこそ、彼にとつて「自娛」の最たるものであつたと見なしてもよいだろう。

蘇軾は陶淵明のように故郷の田園に隱居することはできなかったし、白居易のように安樂に「中隱」の生活を送ることもできなかった。彼は政界の波に弄ばれながらも、「自娛」の精神をもつて積極的に快樂を追い求めた。その結果として見出されたのが仇池であり、仇池石であつたのである。

先に挙げた「和桃花源詩」の末尾には「却つて笑う 秦を逃れし人、畏れ有るは真契に非ざるを」という言葉が見

られたが、ここにはあくまでも「畏れ」ることなく現実に向き合おうとする蘇軾の積極的な精神のあり方を見て取る
ことができるだろう。

小結

蘇軾が憧れた楽園は、仙境と故郷のイメージを兼ね備えた土地であった。彼が仇池を楽園と見なしたのは、仇池が
まさしくそのような地であり、「心を安らかにす」る福地であったからである。仇池に関する蘇軾の言葉には、放浪
の生活の中で溢れ出す望郷の念、あるいは政治の争いの中で湧き起こる平安への願望を見て取ることができる。「魏
闕」と「江湖」の矛盾に直面した蘇軾は、「潁州の夢」に魂の解放を見出し、「自娛」によって精神の苦痛を和らげよ
うとしたのである。

〔注〕

- (1) 清・馮応榴輯訂『蘇文忠公詩合註』（中文出版社、一九七九年）卷四三。以下『合註』と略称する。
- (2) 『後漢書』卷一一六「南蠻西南夷伝」に「白馬氏者、武帝元鼎六年開、分広漢西部、合以為武都。土地險阻、有麻田、出名馬、牛羊漆蜜。氏人勇鬪抵冒、貪貨死利。居於河池、一名仇池、方百頃、四面斗絶」とある。
- (3) 唐・李吉甫『元和郡県志』卷二二に「仇池山、在鼎南八十里。壁立百仞、有自然樓櫓却敵、分置均調、有如人功。上有数万人家、一人守道、万夫莫向。其地良沃有土、可以煮塩、楊氏故累世据焉」とある。また、卷三九「武州」に「禹貢』梁州之域、古西戎地也。戦国時、白馬氏居焉。氏即西戎之別種也。元鼎六年、開白馬氏、以其地为武都郡。魏太祖以楊阜為武都太守。

及劉備取漢中、魏文帝徙武都於美陽、即今好畤界也。後諸葛亮使將攻武都、陰平、遂克定二郡、其地始入於蜀。蜀平後、晉復以為郡。及永嘉南遷、中原背叛、武都又為氐楊茂搜所据、群氏推以為王。其後楊難當為宋所破、其苗裔復擁衆据武都之仇池山、在今成州界。後魏平仇池、於仙陵山東置武都鎮、宣武帝於鎮城復置武都郡。廢帝改置武州。隋大業三年、又改為武都郡。武德元年、復為武州」とある。

(4) 宋・樂史『太平寰宇記』卷一五〇に「仇池山、辛氏『三秦記』云、仇池山上有頃池、平如砥、其南北有山路、東西絕壁、万仞上有数万家。一人守道、万人莫向。山勢自然、有樓櫓却敵之状。東西二盤道、可七里有岡阜泉源。史記謂秦得百二之固、西晋末為氐。楊茂搜所据、立宮室困。倉皆為板屋、乃氐之所。治於此、今謂之洛道是也」とある。

(5) 『晋書』卷七二の「葛洪列傳」に「葛洪字稚川……選為散騎常侍、領大著作、洪固辭不就。以年老、欲鍊丹以祈遐壽、聞交阯出丹、求為句漏令……嶽表補東莞太守、又辭不就」とある。

(6) 『晋書』卷九四の「陶潛列伝」に「潛歎曰『吾不能為五斗米折腰、拳拳事鄉里小人邪!』義熙二年解印去県」とある。

(7) 序文に「至揚州、獲二石。其一綠色、岡巒迤邐、有穴達於背。其一正白可鑿、漬以盆水、置几案間。忽憶在潁州日、夢人請住一官府、榜曰『仇池』。学而誦杜子美詩曰『万古仇池穴、潛通小有天』。乃戲作小詩、為僚友一笑」とある。

(8) 「王晋卿示詩、欲奪海石、錢穆父、王仲至、蔣穎叔皆次韻。穆、至二公以為不可許、獨穎叔不然。今日穎叔見訪、親睹此石之妙、遂悔前語、僕以為晋卿豈可終閉不與者、若能以韓幹二散馬易之者、蓋可許也。復次前韻」(『合注』卷三六)

(9) 周裕鐸「蘇軾の怪石趣味と宋代文人の美意識——堅姿 聊か自ら做め、秀色亦た餐するに堪えたり」(『橄欖』第11号、二〇〇二年、80頁)。

(10) 『東坡詞編年箋證』(三秦出版社、一九九八年)卷三。

(11) 宋・吳曾『能改齋漫錄』卷八に「東坡作『定風波』序云『王定国歌兒曰柔奴、姓宇文氏。定国嶺南遷婦、余問柔『広南風土、応是不好』。柔对曰『此心安処、便是吾郷。』因用其語綴詞云、試問嶺南応不好。却道。此心安処是吾郷』。余嘗以此語本出於白樂天、東坡偶忘之耳。白『吾土』詩云『身心安処為吾土、豈限長安与洛陽』、又『出城留別』詩云『我生本無郷、心安是帰処』、又『重題』詩云『心泰身寧是帰処、故郷可独在長安』、又『種桃杏詩』云『無論海角与天涯、大抵心安即是家』とある。

(12) 埋田重夫『白居易研究 閑適の詩想』第一章「白居易と身体表現」(汲古書院、二〇〇六年、37頁)。

- (13) 「池上有小舟」に「我若未忘世、雖閑心亦忙。世若未忘我、雖退身難藏。我今異於是、身世交相忘」と述べている。(『全唐詩』卷四五二)
- (14) 「和章七出守湖州二首(其一)」に「功名誰使連三捷、身世何緣得兩忘」、「遊惠山三首(其一)」に「還從世俗去、永与世俗忘」、「過大庾嶺」に「今日嶺上行、身世永相忘」、「題沈氏天隱樓」に「非夷非惠真天隱、忘世忘身恐地仙」(それぞれ『合註』卷一三、卷一八、卷三八、『蘇詩補註』卷四七)。
- (15) 白居易「中隱」(『全唐詩』卷四四五)に「大隱住朝市、小隱入丘樊。丘樊太冷落、朝市太囂喧。不如作中隱、隱在留司官。似出復似処、非忙亦非閑。不勞心与力、又免飢与寒」とある。
- (16) 梁・鍾嶸撰『詩品』卷二に「其源出於嵇璜、又協左思風力。文体省淨、殆無長語。篤意真古、辭興婉愜。每觀其文、想其人德、世歎其質直。至如『歆言酌春酒』、『日暮天無雲』、風華清靡、豈直為田家語耶。古今隱逸詩人之宗也」とある。
- (17) 張海鷗著、阿部順子訳「蘇軾における白居易の文化的受容と詩学批評」に「出処進退の方式については、蘇軾は白居易の「中隱」を称賛している」とある(『橄欖』第11号、二〇〇二年108頁)。
- (18) 埋田重夫「白居易研究 閑適の詩想」第一章「白居易と身体表現」に「白詩中において『身』と『心』とが、(「身閑」「終身閑」……、「身適」「形適」「体適」……)、「心閑」「神閑」「思閑」「意閑」……、「心適」「中適」「適意」「適性」「適情」……)のごとく、無数の「閑」「適」的価値と結びついて詠われている」とある(汲古書院、二〇〇六年、36頁)。
- (19) 「答李琮書」に「愚暗少慮、輒復隨緣自娛」、「与陳朝請二首(其二)」に「示論学琴、足以自娛」、「与李通叔四首」其一に「游於藝学、有以自娛」、「与徐得之十四首(其八)」に「簞瓢鷄黍、有以自娛」、「与王慶源十三首(其十一)」に「人生悲樂、過眼如夢、幻不足追、惟以時自娛為上策也」とある(それぞれ孔凡禮点校『蘇軾文集』卷四九、卷五七、卷五七、卷五九。中華書局、一九八六年、以下『文集』と略称する)。「扁舟」「琴」「藝学」「簞瓢鷄黍」など全てが蘇軾を樂しませるものとして捉えられている。
- (20) 「与子由第十首(其十)」に「吾兄弟俱老矣、当以時自娛、此外万端皆不足介懷。所謂自娛者、亦非世俗之樂、但胸中廓然無一物。即天壤之内、山川草木蟲魚之類、皆吾作樂事也」とある(孔凡禮点校『蘇軾文集』卷六〇)。
- (21) 「和子由記園中草木十首(其一)」に「富貴未能忘、声色聊自遣」、「広陵會三同舍各以其字為韻仍邀同賦」の「劉貢父」に「作詩聊

(22)

遣意、老大慵譏諷、「贈葛葦」に「消遣百年須底物、故応怜我不婦耕」とある（それぞれ『合註』卷五、卷六、卷二二）。

「予昔作壺中九華詩、其後八年、復過湖口、則石已為好事者取去、乃和前韻以自解」云（『合註』卷四五）に「江辺陣馬走千峰、問訊方知冀北空。尤物已随清夢斷、真形猶在画图中。帰来晚歲同元亮、却掃何人伴敬通。頼有銅盆修石供、仇池玉色自瓏瓏」とある。

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

蘇軾的樂園與自娛精神

趙 蕊蕊

陶淵明營造的桃花源可以說是典型的中國式樂園。在其之後，許多文人寫過與桃花源有關的作品，這些作品或述說桃花源的故事，或表現對沒有戰亂，和諧安樂的桃花源的嚮往，對桃花源的傳播和接受起到了很大作用。蘇軾晚年創作的《和桃花源詩》對陶淵明創造的仙境似的桃花源產生了懷疑。他曾多次在詩歌中傳達對現實樂園——仇池的嚮往。從他對仇池的描繪，我們可以窺見他在奔波輾轉後所流露出的強烈歸鄉之情，以及在政治的勾心鬥角中渴望過安樂生活的願望。

蘇軾既心繫魏闕又心念江湖，在仕官與歸隱的矛盾中，他選擇了在穎州之夢中，以及在對神仙世界的幻想中尋找心靈的慰藉，以“自娛”的方式淡化著失意和苦痛。“自娛”可以說是蘇軾面對苦難所表現出的積極樂觀、超然曠達的生活態度，它超越了世俗之樂，臻於與自然契合，隨緣自適的精神境界。